
茜ヶ原縁青と赤と緑と青の方法論

暮菱葛葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは、「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

茜ヶ原緑青と赤と緑と青の方法論

【Zコード】

N7426M

【作者名】

暮菱葛葉

【あらすじ】

私立石動学園高等部一年九組出席番号一番、茜ヶ原緑青。

彼の所属する活動内容不明の部活、『図書委員会執行部』には、忍と魔女と吸血鬼！？

方向性未定の学園ノベル、ここから始まる（始まらないでください）！

プロローグ（前書き）

馴文ですがしばしお付き合ひを

不定期更新ですがご容赦ください
どうせ誰も読みませんよ、こんなの

プロローグ

「全く、こんなに凡人が精一杯生きてるつづーのに、世界はそんな
ん知つたこつちゃねーんだぜ」

「お前は多分凡人じやないけどな」

「知つてるよ。俺は天才さ。これ以上なくこれ以下もなくどうしょ
うもない程に、な」

「はあ……。そうかそうか。それに比べて俺は自分がとてつもない
凡人だと信じて疑わないね」

「そりや買い被りだ。お前の何処が凡人なんだよ」

「じゃあ俺は人間じやないんだな」

「ご名答。その通り。お前はいつもいつまでもいつまでたつても人
外さ」

確かにあいつはどうしようもない程に天才だった。
天才過ぎてどうしようもなくなつて、それで。。。

世界に干渉し過ぎた当然の報いなのだろう、仕方がない。世界と
はその程度のものだから。

じゃあ俺は？

世界に不必要的凡人。

世界に不適合な天才。

どちらなのだろう。この水面に映つた鏡の向こう側は

「起きる。……起きるー。」

…………このあたしが起きるつづつんのが解んねーのかつ！！
もつひらりかな春とは言い難くなってきた、といつか普通に暑くなってきた五月二十三日。ついでに言えば月曜日。もつと言えば午前七時四十三分。俺、即ち石動学園高等部一年九組出席番号一番、
あかねがはらくへじょ茜ヶ原縁青は姉に叩き起こされて目覚めた。

より正確を期するなら、蹴り起こされた。背中にドロップキック。
しかも一度も。ダメスティックバイオレンスもここに極まれり、つて感じの激痛が全身に広がる。

なんとなく体がだるかった。全身が鉛どころか水銀みたいな。姉が一旦自分の部屋に戻ったのでもう一度布団に潜る。

「あー。まさか本気で蹴るとは……。痛てえよ」

もう五分くらい寝たかったが、さすがに木刀を持って戻つて来た時点で飛び起きた。

「春眠焼を覚えず、だよね」

微妙に間違つた、というかなんか怖い台詞を呴いてにやりと笑う
我が姉。

大抵の格闘技（柔道と空手と虚刀流）はかじつた俺も、剣道三段の木刀なんか食らつたら真つ一つだ。「……解りました解りました解りましたっ！」

解の字がゲシユタルト崩壊を起こす勢いで起きた。

「ふーん。『飯作つたから降りて来てねー。』 ゆるゆると手を振りながら、さつきまでの激怒が嘘のように、背を向けてあつさり階段を降りていく。何にせよ解はされることはだけは防いだようだ。

剣道三倍段・姉が落ち着いた後、その姉が作った簡単な朝食（味はまあ、正直言えば美味しかった）を済ませ、全力でダッシュ。とはい、学校は家から徒歩五分、つまりは目の前なのだけど。

なんとか遅刻することなく学校にたどり着く。

愛すべき我が母校、石動学園。中高一貫校だけあって、かなりの敷地面積を誇っている。

勉強は言つまでもないが、部活も運動部、文化部問わずかなり優秀。

野球部は甲子園の常連。 サッカー部はワールドカップ選手を続々輩出。

吹奏楽部はちょっとしたオーケストラなんて足下にも及ばない。このぶんだと、帰宅部だつて全国大会とかに出場していてもおかしくない（いやおかしい）。

何を隠そうこの俺も、その部活の為にこんなに走っているのだ。その野球部がランニング中で百メートルはあるだろう列を作つているが、割り込んでぐぐり抜ける。学校に着くと、教室に荷物だけ置いて早速部室へ。途中、同じクラスの男子二人組とすれ違つた。軽く挨拶して通り過ぎる。向こうは、登校して早々教室を出て行く俺を訝しげに見ていたが、どうせ一限は単位を落としても大丈夫だ。そこは計算している。というか、一限の担当教師はうちの部の顧問だから、必然的に自習だし。

その後も同じような視線を浴びながら、部室（と言つても、生徒数が少なくなつて使わなくなつた三階の空き教室だけど）に無事に到着した。

時計を確認すると、もう八時。

「……あちゃー」

みんな來てるな。九十九里^{くじゅうく}はともかく、八崎^{やつざき}とか逢魔^{おうまがとき}刻に怒られませんよーに、と扉を開ける。教室内はがらんどうだった。

……えーっと、あれ？ 誰もいない？ 教室間違えた？ ……待吸。

がつん。

頭に走る鈍く重い衝撃。

「つ痛つたあ……！」

何奴。あ、あれか、俺の暗殺を口論む敵の間者か。

「ごそごそ音がすると思ったら。お前か。私の部屋で何をしている。

茜ヶ原

振り向かなくとも十二分に判別がつく、よく通る綺麗な声。

「ああ、おはよつじでいます、黒崎先生」

部活の顧問で、一年九組担任でもある黒崎蓮華れんか先生。そして俺を『図書委員会執行部』なる活動目的不明な部活に引きずり込んだ張本人である。

どう見ても俺と十歳違わない若々しい美貌と、冬でも着ている浴衣、それと俺を背後から殴打した凶器であるといひの大きな鉄扇がトレードマーク。

……つーかここあんたの部屋じゃねーよ。

「で。茜ヶ原。何をしていると訊いている

言葉が細切れだ。本気で怒ってる。

「今日は。朝は部活はない。昨日言つたはずだ」

「えーっと。そうでしたっけ？」

そんな話あつたかな、と多分今の一撃で脳細胞の八割が六道輪廻の旅へと旅立つただろう頭を働かせる。

「……お前という奴は。八崎あたりの爪の垢でも煎じて飲んでいろ。まあいい。授業だ。戻るぞ」

そんなに授業を自習にばかりさせられないだろう、理事長に怒られてしまふからな、と先生は今日初めての笑顔を見せた。魅力的な、ただしつや消しの笑顔を。

はあ。今日は何の日なのだろう。朝からこんな目に遭うなんて、第一話か最終話くらいのもんだ。死ぬのかな、俺。

残りわずかな脳細胞を無駄な思考に使いつつ、先生に付いていく。

その後茜ヶ原縁青がどうなったのか。プライバシー保護の観点から伏せておこう。ただ、しばらく俺のニックネームが「転校生」になっただけ言っておく。

002 茜ヶ原縁壱と蠍夷グリー・ハーハン（前書き）

やつと続きの投稿になります。

放課後。部活の時間。

「く、はははははははははははははははははつ！」

不愉快な笑い声が聞こえる。部室の扉を開けると、案の定九十九里くじゅうくだった。

一年九組出席番号九番、九十九里九隠くおん。クラスメイト。なのにいつも俺より早く部室に着いている。銀髪逆毛。大量のベルトポーチを装備しているのが特徴。ちなみに中に何が入っているのかは知らない。

今日は朝からずつと笑っている。といつのも、

「……五月蠅さつきい、九十九里」

「応、来たか、転校生！」

というわけである。

……そんなに俺の遅刻が面白いか。

教室を見回すと、朝とは違い、部員は全員集合していた。

「そんな呼び方は良くないですよ、九十九里さん。いくら茜ヶ原さんだつて転校生なんて呼ばれたら怒りますよ」

一年八組、他クラスなので出席番号までは知らないハ崎やつざき鉛花なたか。烏からすの濡れ羽色の、俺の姉に負けず劣らず長い髪。日本人形のような、整つた顔立ち。スカート長めの制服。物騒な名前とは結びつかない、典型的な優等生。確かクラスの委員長。

「でもさでもさ、アカネくんの失敗つてなかなか無くて面白いよね！」

そう言つたのは一年七組、同じく出席番号不明、逢魔おいまがとき刻手首てくび。シンテール。くりくりとした目。制服は、長めの上着に短いスカート。頭には魔女みたいな帽子を載せている。八崎とは対照的な外見。

「……」

そして俺、茜ヶ原縁青。

四人揃つて図書委員会執行部。いやこれは部活とかじゃねーよ。
動物園かなんかだろ。

「で、今日は何するんだ?」

「それがな、黒崎ちゃんがいねーのよ、で、一人と話してたわけ
「嘘だー。九十九里はずーっとアカネくんの悪口言つてたんだよ」
あつさりバラされる九十九里だった。あと逢魔刻、アカネくん呼ばわりは止める。

「それで、四人揃つたら話し合いをしようと思いまして、茜ヶ原さんを待つていました」

どうも要領を得ていないが、まあいいか。どうせ先生の思い付きでできた部活だし。活動なんてあつてないようなもんだ。

「で、どーすんよ転校生」

「転校生言うな。

……別に、俺が決める話じゃないだろ
「どーすんよ」

両手を挙げて肩をすくめる九十九里。

「どうしょー」

ツインテールの毛先をいじりながら首をかしげる逢魔刻。
「どうしましょー、この子」

唇に人差し指を当てて、考えるような動作をする八崎。

一様に困る図書委員会執行部員たち。こうこうの場合、帰ればいいのに つて、『いの子』?

「八崎。今『いの子』つて言つたか

「はい、言いましたけど……」

改めて教室を見渡してみると、いじで初めてもう一つの人影に気が付いた。

教室の後ろ、ロッカーの辺りに人間がいた。年は多分十歳くらいだろう。あんまり背は高くない。つていうか、なんで高校に小学生が。今は五月下旬。普通に授業があるはずだけど。

「えーっと、茜ヶ原さん、この子、蝦夷グリーンランドさんです

蝦夷グリーンランド？ およそ人の名前とは思えない。九十九里

九隠とかハ崎鉈花とか逢魔刻手首とかがまだマシに思えてくる。

「アカネくん、今、失礼なこと考えたよね」

バレたか。当然だけど。

「で、この子供をどうしろと？」

「しばらく預かつて欲しいというのです」

「は？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7426m/>

茜ヶ原緑青と赤と緑と青の方法論

2010年10月8日14時21分発行